

イースターメッセージ
からだのよみがえり

大久保正禎 (日本基督教団王子教会牧師)

イースターは、十字架にかけられて殺されて、墓に葬られたイエス様が、しかしもう一度よみがえったことを知らされる、クリスチャンにとっては喜ばしい出来事です。しかしマルコによる福音書は、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメという三人の女性が、空っぽの墓の中にいた天使に「あの方は復活なさって、ここにはおられない。さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。そこでお目にかかれる』と」と告げられたにもかかわらず、「墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである」という場面で終わっています。女性たちはイエス様の復活を喜ぶどころか、恐れあまり言葉を失い逃げ去ったという、みじめな終わり方です。

そこにいたのが皆女性だったというのが気になります。最初の教会で言葉を連ねて華々しく伝道をしていたのは男性中心だったでしょう。女性たちはその陰で言葉を奪われ、目立たない存在だったかもしれません。でも、男の弟子たちが皆逃げ去ってしまった一方で、あの女性たちだけが、逃げずにイエス様が十字架上で息を引き取るのを見守り、イエス様の遺体の世話をしようとして墓へ出かけて行って、そこでイエス様の復活に最初に出くわしたのも、この女性たちだったと福音書は伝えています。女性たちは言葉を失ってはいたけれど、華々しい言葉を連ねるよりも前に、身体を動かしてひとの身体に触れ、命に触れ、その世話をし続けました。その女性たちの、口先ではない「からだ」にこそ、復活したイエス様の「いのち」は宿っていることを伝えようとして、それで福音書はあんな終わり方をしているのじゃないか、と思い巡らせました。震え上がってはいるけれど、それでもなお、ひとの身体に触れ、命に触れ、その世話を続ける女性たちの、その身体の中からこそ、いつか本当の生きた「ことば」がよみがえり、湧きだしてくるのをじっと待ちながら、福音書の書き手は筆をおいたのじゃないかしら、と。

昨年からは教会を会場に「子ども食堂」を始めました。「居場所」を必要とする子どもたちがひとり、ふたりと集まってきました。どの子も家庭

や学校での辛い経験をすぐには口にしません。身体を寄せ合って一緒に食事の準備をし、一緒に食べるなかで子どもたちの顔に笑顔がよみがえります。はじめて食堂に来た子が、わたしの顔を見るなり発した言葉が胸に響きました。「ああ、優しそうな人でよかった」。わたしの顔は決して「優しそうな顔」ではありません。子どもの身体から湧きだしたこの小さな言葉が、わたしの顔に優しさをよみがえらせてくれました。復活されたイエス様のいのちは、今もわたしやあなたの、この身体に宿っているのでしょう。やがていつの日か、本当に喜びを呼び交わす、生きた言葉としてよみがえり、湧きあふれるのを待ちながら。